

がん解明もがき続ける



日本人の2人に1人がなり、3人に1人がそれで死ぬと言われる「がん」。がんの仕組みを解明し、治療につなげようと、基礎研究に没頭して40年近くになる。

実家は祖父の代から秋田市で医院を営む医者一家。父も兄も医者だ。物心つく頃から自分も医者になると決めていた。秋田大の医学部生のとき、「目の前の患者の後ろにいる1千万人の患者を治したい」と、研究者になることを決めた。院生3年目、国立がん研究センターの研究職の募集を目にし、28歳で東京に飛んだ。半年間の短期契約だったが、見込まれて結局11年間過ぎた。

基礎研究の現場に携わり40年 島 礼さん(64)



しま・ひろし 1956年、秋田市生まれ。2014年から宮城県立がんセンター研究所長。医療研究を支援する日本医療研究開発機構(AMED)で、次世代がん医療分野の評価委員長も務める。

をひっぱる立場だ。

いま注目しているのが、がん細胞の代謝だ。

たとえば、がん細胞は正常細胞よりグルコース(ブドウ糖)を多く必要とすることがわかっている。PET(陽電子放射断層撮影)検査では、ブドウ糖の取り込みが激しい部分を探すと、がんを見つける。では、なぜがん細胞は自身の生存のために多くのグルコースを必要とするのか。そうした解明が治療に役立つと信じている。

された。DNA修復に異常が起こったために発生したがん細胞は、さらにPARPの働きを止めると、DNA修復が完全にストップしてしまい、がん細胞自身が死に至るのだ。その薬「オラパリブ」は、2018年から国内でも一部の乳がん患者らが保険で使えるようになっていた。



間かけた。

39歳でスイスの研究所に転職した。がんセンターに残ることもできたが、海外で視野を広げたかった。「いろんな人と出会

い、いろいろな経験をすること。が研究者にとって大事」と振り返る。スイスでは、「ラパマイシン」という臓器移植の拒絶反応を防ぐための免疫抑制剤が、一部のがんに効くメカニズムを研究した。実験のため特定の遺伝子が欠けたマウスを生み出す必要があり、そのためだけに3年間かけた。

帰国後は北海道大に7年在籍した後、宮城県名取市にある県立がんセンターに移った。今は研究所長として若いがん研究者をつもりだ。(曾田幹東)

大湯環状列石

世界遺産登録へ イコモスが調査

「北海道・北東北の縄文遺跡群」として世界遺産登録を目指す17遺跡の一つ、鹿角市の大湯環状列石で6日、ユネスコ(国連教育科学文化機関)の諮問機関であるイコモス(国際記念物遺跡会議)の専門家による現地調査があった。調査結

果を元に、世界わしいかどうか、年5月にもユネスコに申請する。

専門家や文化らは午前9時スタート。調査はその後、万座、大湯環状列石を調査し、イコモスから、日本側の担



現金高価買取
ピアノ
お売り下さい